

## 序

民俗学と歴史学とは、全く同一のものではない。しかしながら、われわれが現時点に於て、見たり聞いたりするものの中に在つて、注意深く観察する時、その由来・性質を考えると、幽遠の太古の日本民族の原質に突き当ることがある。われわれの民俗は、歴史の所産である。即ち、歴史学と民俗学とは全然無縁のものではないということになる。

私は日本国家の起源という、とてつもなく大きい問題を解明する手始めとして、極めて小さい民俗遺産の例をここに持ち出そう。それは蓑・笠である。

今もなお、信州方面の旧家の門口には、この蓑・笠を吊るしてあるところがある。吊るしてあるとはいつても、それを必要の時に使用するのではない。単に飾つてあるだけである。或いは又、都会に在つても、水商売を営む人々の家の壁に小さな蓑・笠を飾つているところもある。そのいわれを知る者にとつては、それが福の神の到来を希求するものであることを知つている。

それはそれは遠い遠い大昔に、何所か知れぬが、時を定めて海の彼方から、遙々やつてくる、「マレビト」がいた。われわれの祖先はその海の彼方にある国を常世といつていた。古代の人々は、村の祖先以来の魂は、一つ残らずその常世に集つているものと信仰していたのである。即ち、子孫の田に降臨して稲の実りを豊かにする祖霊というものは「マレビト」達に伴われて、そこからやつてくるものだと思われていた。この「マレビト」の居る常世の実態が解明するなら、わが日本国家の始源の解明に一步を踏み入

れたというべきである。統一的なるものの矛盾に満てる構成分の認識は辨証法の本質であるという有名な言葉がある。常世と高天原とは一見矛盾するかのような概念ではあるが、その実、一つのものであったのである。それは以下に於て逐次解明されていくことであろう。そこで、菘・笠神の本據であつた常世のヴェールを剥がしていこうと思う。

昭和五十三年二月十九日の朝日歌壇の選歌の中に神戸の方の人で、山田さつき氏の歌に「武力にて制覇されしを祝ぐというしかも史実なき建国記念日」というものがあつた。

史実でない建国記念日を祝うというのは、おかしいではないか、こう思う人は数多いことであろう。ところで、この年の建国記念日祝賀会長黛敏郎氏は、「日本書紀の建国の記述は、たとえ事実として立証できなくとも、事実極めて近いもの、むしろ神話だからこそ、荒唐無稽といい切れない古代日本人のロマンに満ちた心の真実なのだ。」と大声疾呼して大喝采を浴びたという。わたくしはこれらの人に反対するものでもなく、與するものでもない。ただ史実は斯く斯くであると立証するのみである。種々不備のそしりは免がれないが、今も花ざかりの邪馬台国論争も、この史実を基本に論じなくては、一切無駄である。福江島を進發した、所謂皇軍なるものは、何故に長崎港への至近距離を選ばずして、薩摩半島笠沙の岬に上陸したのであるか？ ここには魏志倭人伝に記された狗奴国一味が同志として待ち設けていたものとみねばならぬ。大和政府樹立後、日成らずして、この同志の団結にひびがはいったものであろう。骨肉相食む苛烈の鬪争が場所を九州に移して始つた。それは恰も志を得ざる薩摩隼人が西郷隆盛を擁立して戦いを挑んだ西南の役と同じものであつた。おそらく、これを読む者の中には絶賛の

声をあげてくれる方もあろう。またその反対に目を瞑らす者もあるであろう。法華経に曰く、正法を説く者は、数々見擯出・又曰く、刀杖瓦石の難と、眞実を説く者にも、また斯くの如き憂いを抱かせることであろう。老骨何ぞ身命を惜まん、すべて覚悟のうえである。